

中国人日本語学習者による間接発話行為の理解

李 璐 日本語教育学分野・専門 博士後期課程3年

研究内容 本研究では、Taguchi (2008) の語用論聴解テストを修正・改善し、正確さと速さという2つの指標から中国人日本語学習者の間接発話理解を測定した。また、学習者の聴解力、語彙アクセスの効率性(速さと正確さ)、自閉傾向を実測し、これらが間接発話理解の正確さおよび速さに及ぼす影響を検討した。

調査対象 中国の大学で日本語を専攻とする2年、3年、4年生の合計65名である。

調査概要 E-prime 3.0で実験①と②のプログラムを作った。①間接発話理解実験。間接発話理解実験は、練習2項目、慣習・非慣習の間接意見の理解課題それぞれ12項目、間接断り12項目、フィルター12項目からなる。50項目のそれぞれは、視覚提示の宣言文、音声提示の男女2者間の会話から構成した。間接発話文が2者間会話の最後のターンとして組み込まれた。2者間会話の音声が消えた時点から学習者がYES/NOのボタンを押すまでの時間と、判断の正誤をコンピュータで記録した。②有生性判断実験。有生名詞43語、無生名詞43語からなる音声提示の実験である。有生・無生名詞両グループの語彙難易度、使用頻度、モーラ数を統制した。各語の音声提示の開始から学習者が判断をするまでの時間と正誤判断の結果を記録した。③聴解テスト。早川・魏・初・玉岡 (2016) が開発した聴解テストを使った。④中国語版自閉症スペクトラム指数。李・玉岡 (2019) が開発したAQ25 (Autism-Spectrum Quotient 25) を使った。

分析と結果 R Studio 上で lme4 パッケージの lmer コマンドで起動する線形混合効果 (linear mixed effects) モデルを使って分析した。①理解速さの分析と結果。反応時間の分析は正しく判断された1,959項目のみを使用した。Box-Cox power transformation のラムダ (λ , lambda) を指標として最適なデータ変換の方法を判定し、間接発話理解および語彙アクセスの反応時間は対数変換が最適であったため、自然対数に変換してから分析した。分析では、被験者 (subject) と刺激項目 (stim) をランダム効果とし、試行順序 (trial)、3種類の間接発話 (condition)、自然対数に変換した語彙アクセスの速さ (loglexrt)、語彙アクセスの正答率 (lexacc)、聴解テストの得点 (listening)、自閉症スペクトラムの得点 (autistic) を固定効果とした。赤池情報量 (AIC) でモデルを比較したが、 $\text{lmer}(\log(\text{pragrt}) \sim (1|\text{subject}) + (0+\text{trial}|\text{subject}) + (1|\text{stim}) + (0+\text{trial}|\text{stim}) + \text{trial} + \text{loglexrt}, \text{data})$ が最適であった。さらに、このモデルの誤差の分散で「誤差平均±標準偏差2.5」を境界値として外れた値を除外した (41個が除外された)。被験者ごとの試行順序が間接発話理解の速度に対して有意に影響した [$t(52.86) = -7.05, p < .001$]。また、語彙アクセスの速さも有意であった [$t(63.26) = 6.91, p < .001$]。語彙アクセスが速ければ速いほど間接発話の理解も速くなった。②理解正確さの分析と結果。間接発話理解の正確さは、誤答が0、正答を1として、LME (lme4 パッケージの glmer) の二項 (binomial) で分析した。被験者と刺激項目をランダム効果とし、試行順序、間接発話の種類、自然対数に変換した語彙アクセスの速さ、語彙アクセスの正答率、聴解テストの得点、自閉症スペクトラムの得点を固定効果として、正誤を予測するモデルを模索した。赤池情報量で比較した結果、 $\text{glmer}(\text{pragacc} \sim (1|\text{subject}) + (0+\text{trial}|\text{subject}) + (1+\text{trial}|\text{stim}) + \text{trial} + \text{lexacc} + \text{listening}, \text{data}, \text{family} = \text{binomial})$ が最適となった。被験者ごとの試行順序が間接発話理解の正確さを有意に予測した [$z = 4.37, p < .001$]。語彙アクセスの正答率も有意であった [$z = 4.03, p < .001$]。語彙アクセスの正答率が高ければ高いほど、間接発話理解の正確さも高くなった。さらに、聴解力も有意であった [$z = 2.96, p < .01$]。被験者の聴解力が間接発話理解の正答率を促進した。

参考文献

- Taguchi, N. (2008) Pragmatic comprehension in Japanese as a foreign language. *The Modern Language Journal*, 92(4), 558–576.
 早川杏子・魏志珍・初相娟・玉岡賀津雄 (2016) 「中国語および韓国語を母語とする日本語学習者のデータを基にした日本語聴解能力テストの開発と評価」『関西学院大学日本語教育センター紀要』5, 31–45.
 李璐・玉岡賀津雄 (2019) 「中国語版『自閉症スペクトラム指数 (AQ)』の開発」『音声言語医学』60(4), 314–324.